

大オルダの興隆 : クチュク=ムハンマドと息子たち

| | |
|----------|---|
| その他のタイトル | The rise of Great Horde : Kuchuk Muhammad and his sons |
| 著者 | 中村 仁志 |
| 雑誌名 | 関西大学文学論集 |
| 巻 | 70 |
| 号 | 3 |
| ページ | 1-18 |
| 発行年 | 2020-12-18 |
| URL | http://hdl.handle.net/10112/00022241 |

大オルダの興隆～クチュク＝ムハンマドと息子たち～

中 村 仁 志

はじめに

モンゴル軍の西方遠征を契機として13世紀に成立したキプチャク汗国は、北方のロシアの諸公国を隷下に置いた。これに始まって15世紀後半までつづいたモンゴルによるロシア支配は、「タタールのくびき」¹⁾と呼ばれ、ビザンツ帝国からのギリシア正教の受容、とくに10世紀末のウラジーミル1世による国教化とならんで、ロシアの行方を左右した歴史的事象であり、その重要性については贅言を要するにおよばない。

また、この長きにわたるモンゴル＝タタール勢力の支配は、ロシア人の性格に消し難い刻印をきざみつけ、西ヨーロッパに住む人々の目には印象深く映るロシア人独特の民族性をはぐくむ要因となったとされる。「ロシア人を一皮むけばタタール人があらわれる」という人口に膾炙した俗言は、そうした見方を端的に示すものであろう。

ロシアの歴史にかくも大きな痕跡をのこした「タタールのくびき」は、開始、動揺、終焉という三つの節目を経ながら推移した。歴史書のなかでは、これらの節目をそれぞれに象徴する人物としてバトゥ、ママイ、アフメトの三人の名前が挙げられている。

モンゴルによるロシア支配＝「タタールのくびき」を開始したのは、チンギス汗の孫にあたるバトゥであった。モンゴルの西方遠征の司令官であり、キプチャク草原の遊牧民を支配下に組み込んでキプチャク汗国を樹立することによってモンゴル帝国のありように大きな影響をおよぼしたバトゥは、ロシア史のみならず、世界史上でも有名な存在となっている。

ついで、ママイの時代に、「タタールのくびき」は、その屋台骨をゆるがすようなダメージを受ける。1380年、ドン川河畔のクリコヴォにおける戦いでモスクワ大公ドミトリーのひきいる軍勢がママイの指揮下のタタール軍を打ち破ったのである。この武勲をたたえてドミトリーはドンスコイ（＝ドン川の）と称されるようになる。ただ、この勝利はロシア＝タタール関係における画期的な出来事ではあったものの、そのままタタール支配の消滅につながったわけではなく、ロシアは、その後勢力を盛り返したキプチャク汗国の「くびき」にふたたび服することになる。

2世紀半近くつづいた「タタールのくびき」は、15世紀の後半に終焉を迎える²⁾。その契機となったのは、1480年の「ウグラの対陣」³⁾であった。モスクワの南方を流れるウグラ川をはさんで、北進してきたタタール軍とこれを迎え撃った大公イヴァン3世旗下のロシア軍が対峙、対陣をつづけたすえにタタール側が撤退したのである。この時タタールの遠征軍をひきいていた人物が、アフメト（アフマート）であり、このため彼の名前は「タタールのくびき」の終焉の象徴となった。

このように重要な役回りをはたすべく歴史の舞台に登場してきたアフメトは、しかし、ロシアの歴史叙述においては、キプチャク汗ではなく大オルダの汗と呼ばれている。キプチャク汗によってはじめられた「タタールのくびき」が大オルダのアフメト汗との対陣によって終結したというのである。こうしたロジックが成立するための前提としては、キプチャク汗と大オルダの汗との事実上の同一視があろう。

14世紀後半より内部抗争がたえなかったキプチャク汗国は、15世紀には分裂・解体の道をたどり、クリミヤ汗国・カザン汗国・ノガイ・オルダなど、それぞれに汗（ノガイ・オルダの場合はバク）をいただくタタール人の独立勢力が成立していった。かくして、タタール人諸国家の首長が併存するなかで、かつてのキプチャク汗の事実上の後継者とみなされたのが大オルダの汗であり、それゆえに「ウグラの対陣」とアフメトの撤退は、「タタールのくびき」の終

焉を画するのにふさわしい出来事とされるのである。

大オルダの汗アフメトは、何の背景もないところからいきなり徒手空拳で出現してきたわけではない。彼の父のクチュク＝ムハンマドや兄マフムードもタタール勢力の支配者であった人物であった。それゆえ、父や兄の時代からアフメトへと権力が継承されていく過程は、キプチャク汗から大オルダの汗への移行を解明するうえで、極めて重要な意味をもっているといえよう。本稿では、この点を念頭におきながら、クチュク＝ムハンマドにはじまり、マフムード、アフメトへとつづく一族の歴史をたどりながら大オルダの性格について検討するとしたい。

1 クチュク＝ムハンマド

キプチャク汗国は14世紀前半に出たウズベク汗（在位1313-41年）の時代に最盛期を迎えるが、その後、14世紀後半からは内部抗争が激しくなり統一の実が失われていった。この政治的な不安定を一時的に克服したのが14世紀末から15世紀初めにかけて活躍したトフタムイシュとエディゲイである。1380年に汗となったトフタムイシュのもとでキプチャク汗国は統一を取り戻した。その後、エディゲイは、チングス汗の血統者でなかったため自らが汗位につくことこそなかったものの、キプチャク汗国随一の実力者として傀儡の汗を擁立して国政を牛耳った。

傾きつつあるキプチャク汗国の屋台骨を支えていたトフタムイシュとエディゲイが15世紀のはじめにあいついで世を去ると、汗国の分裂・解体の傾向はとどめようがなくなってくる。そうしたなかキプチャク汗国の主要部分を手中にして、その後継とみなされるようになった勢力が大オルダである。そのはじまりについての見解はさまざまであり、1430年代なかばにすでに大オルダが存在していたとする研究者のあいだでも、誰がその最初の汗であったかについては、ウルク＝ムハンマド、クチュク＝ムハンマド、サイド＝アフメドの3人の人物のあいだで意見が分かれている⁴⁾。

三者のなかでは西方に位置し黒海の北方に広がるステップ地域を支配の基盤としていたのはサイド=アフメドである。トフタムイシュの近い血縁（子ないし孫）でその威光を背負ったサイド=アフメドは、クリミヤ半島を含む黒海北岸地域を掌中におさめタタール世界の再統一を図ろうとした⁵⁾。一方、バトゥ以来歴代のキプチャク汗の居所サライが置かれ汗国の政治的中心となっていたヴォルガ川の下流域の支配をめぐる覇を競ったのが、ウルク=ムハンマドとクチュク=ムハンマドであった。

ウルク=ムハンマドとクチュク=ムハンマドのうち最初に歴史の表舞台に登場したのは、ウルク=ムハンマドであった⁶⁾。もともとクリミヤ半島を地盤とする一族の出であったウルク=ムハンマドは、1419年にクリミヤを進発し、ヴォルガ川流域を支配下におさめ汗たるの名乗りを上げた。サライを拠点として権力をふるったウルク=ムハンマドは、権力争いに敗れて一時的にサライを去らざるをえないことがあっても、そのたびに捲土重来をはたし、20年近くにわたって汗の座にあった。

これに対し、サライの下流、ヴォルガ川の河口部のハジー=タルハン（後のアストラハン）などに拠りながらウルク=ムハンマドに対抗したのが、クチュク=ムハンマドであった。サイド=アフメドがトフタムイシュの近縁であったのに対し、クチュク=ムハンマドは、エディゲイの一門と緊密なつながりを持っていた。エディゲイの息子ヌル=アッディンは娘をクチュク=ムハンマドの父で、1410年から12年にかけて汗の地位にあったティムールに嫁がせており、彼女がクチュク=ムハンマドの母親であった可能性も指摘されている⁷⁾。もし、それが事実であれば、クチュク=ムハンマドはエディゲイの曾孫ということになる。また、クチュク=ムハンマド自身、おそらくはエディゲイの宮廷で育ったといわれる⁸⁾。

エディゲイとゆかりの深かったクチュク=ムハンマドの権力への道には、エディゲイの一族と彼らがひきいた部衆であるマンギート⁹⁾が密接にかかわっていくことになる。エディゲイ一門のなかでも、とりわけクチュク=ムハンマド

と関係が深かったのは、エディゲイの息子のマンスール、ガージー、ナウルスの兄弟であった。

兄弟のなかの最年長であったマンスールは、はじめは幼少のクチュク＝ムハンマドを擁立したものの、その後彼から離れて、キプチャク汗国の東部を根拠地にしていたボラクのもとに去った。そこで汗につぐ顕職であるベクリヤリベクの地位についたマンスールは、ボラクとともに1420年代初めウルク＝ムハンマドを破って彼をヴォルガ川流域から追った。その後、リトアニアの支援を得て再起してきたウルク＝ムハンマドとボラクの抗争がつづくなか、ボラクはマンスールと不仲となり、彼を裏切りのかどで処刑してしまう。このためそれまで兄のマンスールとともにボラクの配下にいた弟のガージーとナウルスは彼のもとを去ってクチュク＝ムハンマドのもとに身を寄せ、20年代末には兄の仇であったボラクを攻めて敗死させた¹⁰⁾。

その後、ほどなくしてガージーとナウルスの兄弟は二人のムハンマドの陣営に分かれることとなる。ナウルスは年長で長らく汗としてサライに君臨した大ムハンマドことウルク＝ムハンマドのもとで、ガージーの方は年少の小ムハンマドことクチュク＝ムハンマドのもとで、それぞれベクリヤリベクの地位にいたのである。

ナウルスは、約10年にわたってウルク＝ムハンマドのベクリヤリベクをつとめたが、最終的には両者の仲は決裂した。ウルク＝ムハンマドを見限ったナウルスは部衆を引き連れてクチュク＝ムハンマドのもとへはしり、その間すでに死亡していたガージーにかわってベクリヤリベクとなった。

ナウルスの出奔によってウルク＝ムハンマドとクチュク＝ムハンマドの力関係は、後者の優位へと大きく傾いた。汗の座を求めてサライをうかがうクチュク＝ムハンマドの圧力に抗しきれなくなったウルク＝ムハンマドはついに一族郎党を引き具して北方へと去った。かくしてヴォルガ川下流域を一手におさめたクチュク＝ムハンマドが汗の地位についた。

上記のように、クチュク＝ムハンマドの登玉にあたっては、ナウルスらエディ

ゲイの息子たちが大きな役割をはたした。となれば、彼らが父のひそみに倣おうとしたとしても自然ななりゆきであったろう。かつてエディゲイは傀儡の汗を立てつつキプチャク汗国で権勢をほしいままにした。エディゲイから受け継いだマンギートの部衆の軍事力を背景に年若いクチュク=ムハンマドをおしたてて汗の座につかせたナウルスとすれば、名ばかりの汗のもとで諸事を差配する、事実上の第一人者となっても不思議ではなかったのである。

実際、年若いクチュク=ムハンマドにとって、老練のウルク=ムハンマドにかわって汗位を手にする道が開いたのは、自身の陣営へのナウルスと彼の配下のマンギートの参入があつてのことである。「14歳の汗はナウルスにひきいられた寝返り組の教唆によりサライを目指したに違いない」とトレバヴロフも指摘する通りである¹¹⁾。

とはいえ、エディゲイの時代のような強力すぎるベクリヤリベクのかたわらで、ただの飾り物として玉座に鎮座しているだけの汗となるのはどうか。問題はクチュク=ムハンマドがそうした立場に甘んじられるかどうかである。はたして事件はおこつた。ウルク=ムハンマドを駆逐してサライの主になってから2年後の1440年、クチュク=ムハンマドはナウルスを殺害するという拳に出たのである¹²⁾。ナウルスのもつ強大な権力が汗のそれを凌駕しかねないという危機感のゆえんであり、エディゲイ時代のような傀儡の汗にとどまる気はないという意思の表れとしての荒療治であつた。

2 有力者たち

実力者のナウルスを排して実権を掌握したものの、クチュク=ムハンマドには、かつてのキプチャク汗が草原地帯全体を自分の威令に服さしめたような絶対的な権力はなかつた。クチュク=ムハンマドが汗であつた時代、彼の支配領域であつたヴォルガ川下流域の東西には、それぞれ強力な遊牧勢力が存在した。西方のクリミア半島から黒海北岸にはサイド=アフメドが、ヴォルガ川の東方からシベリアにかけてはアブル=ハイルが、それぞれ汗として君臨してお

り、クチュク＝ムハンマドを中央にして、3人の実力者が東西に並びたつ三者鼎立の情勢が見られたのである。

東西の有力者のうちクチュク＝ムハンマドの本拠であるヴォルガ川下流域に圧力をかけてきたのが東方のアブル＝ハイルであった。ウズベクと呼ばれる遊牧民の集団を糾合して強盛を誇っていたアブル＝ハイルは、しばしば西方を襲撃してクチュク＝ムハンマドの一族を窮地に陥らせた。

こうした展開は、汗となりうる血統的な資格をそなえた有力者のあいだでくりひろげられたキプチャク汗国のヘゲモニー争いの一局面であった。チンギス汗の長子であったジョチとその子孫たちが支配した領域・部衆をジョチ＝ウルスという¹³⁾。もともとのジョチ＝ウルスの領域は、ジョチが父チンギスから与えられた西シベリアのイルティシュ川の流域を中心とする地域であったが、その後、モンゴルの西方遠征を機にジョチ一門の勢力範囲は大きく西方に拡張をとげ、それにともないジョチ＝ウルスの重心も西に移動することとなる。

西方遠征の司令官であったジョチの次子バトゥは、遠征の結果、カスピ海から黒海にかけての北岸に広がるキプチャク草原とそこで遊牧生活を営んでいたテュルク系のキプチャク人¹⁴⁾を支配下に組み入れて強大な遊牧勢力をつくりあげた。ジョチ＝ウルスのこの巨大な拡大部分がキプチャク汗国（金帳汗国）である。

ジョチ＝ウルスはモンゴルの国家の常として左右両翼体制をとっており、その内部で白帳汗国、金帳汗国、青帳汗国に分かれていた。ジョチ＝ウルスの本領にあたるイルティシュ川流域をジョチの長子オルダが弟たち（その一人が後述のトゥカ・ティムル）をしたがえつつ受け継いだのが左翼の白帳汗国、次子バトゥがサライを都として弟たちとともに支配したのが右翼の金帳汗国、そして両者にはさみこまれるようにしてウラル川の東方にあったのが第5子シャイバンらが支配した青帳汗国であった。そしてこのなかでは最大勢力であったバトゥ系の金帳汗国の汗が自然、ジョチ＝ウルス全体を代表するような立場となった。金帳汗国すなわちジョチ＝ウルスという見方はそうした事情を反映

してのものである¹⁵⁾。

数多くいたジョチの息子たちの系統のなかで、キプチャク汗国が解体していく過程で生じた汗位争いの主軸となったのが、ジョチの第13子のトゥカ・ティムルの血統者であった。本稿でこれまで名を挙げたトフタムイシ、ウルク=ムハンマド、クチュク=ムハンマド、サイド=アフメドのいずれもが、このトゥカ・ティムルの家系の一員であったのである¹⁶⁾。

これに対し、東方の雄であったアブル=ハイルは、ジョチの第5子であったシャイバンの家系に属していた¹⁷⁾。この点、クチュク=ムハンマドの一族とアブル=ハイルの抗争は、トゥカ・ティムルの家系とシャイバンの家系とのあいだのジョチ=ウルスの主導権をめぐる争いという側面ももっていた。

西シベリアからカスピ海の北方にひろがる草原を拠点とするアブル=ハイルのもと、シャイバン家の関心は西方のヴォルガ川方面だけでなく東方や南方にも向けられていた。

東方においてアブル=ハイルが対応を強いられたのは、遊牧勢力のオイラト=カルムイクの西進である。アブル=ハイルは1457年にカルムイクに敗れた。さらに、1463-64年ころにも手痛い敗北を喫しており、カルムイクの圧力に抗するのに苦慮させられた。

そしてもう一つ、アブル=ハイルが精力を注いだのが南方の中央アジアへの進出である。アブル=ハイルは1431年にはホレズムに侵入、1446年にはシル川下流域を占領して、スイグナクを奪取してこれを首都とした¹⁸⁾。この後もウズベク人をしたがえたシャイバン家の遊牧指導者たちは、ティムール朝を圧迫しながら中央アジアに進出、ついに、アブル=ハイルの孫にあたるムハンマド・シャイバーニーが、1500年にウズベク人のシャイバーニー朝を樹立し、ティムール朝を滅ぼした。これを契機としてウズベク人が住民の主要部分を占めるようになっていったのが、現在のウズベキスタンである。

ティムール朝がそもそもチャガタイ汗国領の西部で勃興した勢力であることを想起すると、アブル=ハイル以来のシャイバン家の南下はジョチのウルスに

よるチャガタイのウルスの西部の浸食という性格ももっており、この点ではモンゴル帝国の再編の一過程ともとらえられよう。

強大な軍事力をもったアブル＝ハイルの矛先が、クチュク＝ムハンマドの基盤であった西方のヴォルガ川の下流域だけでなく、東方や南方にも向けられていたのは、クチュク＝ムハンマドとその一族にとっては貴重な息継ぎの機会を提供した。その一方で、ヴォルガ川の西方の勢力分布はどのようになっていたのであろうか。

西方にあっては、本領にあたる黒海北岸の草原地域にくわえてクリミヤ半島をも傘下に収めたサイド＝アフメドが、強大な遊牧帝国をきざっていた。このサイド＝アフメドとクチュク＝ムハンマドとのあいだには熾烈な勢力争いがくりひろげられた。1430年代末から40年代初めにかけてはクチュク＝ムハンマドがドン川流域、ヴォルガ川流域を占領するなど押し気味であったが、その後、趨勢は逆転、1449年ころにはサイド＝アフメドによってドン川流域から追われるという状況であった¹⁹⁾。

こうしたクチュク＝ムハンマドとの争いとならんでサイド＝アフメドが深い関心を寄せたのが西北のリトアニアの動向であった。サイド＝アフメドは東ヨーロッパの雄であったリトアニア大公ヴィータウタスの宮廷で傅育された経験をもつなどリトアニアと深いつながりをもっていたのである²⁰⁾。このためヴィータウタスの没後、1440年代後半にリトアニアで大公の位をめぐる内訌がはじまると、サイド＝アフメドはその争いの渦のなかに積極的に身を投じていくこととなった。

サイド＝アフメドがこの時戦った相手は、ヤギェウォ朝の開祖ヤギェウォの息子であったカジミエシが同君連合の君主となっていたポーランド＝リトアニア、さらにカジミエシの側についたモスクワ大公国であった。これらの諸国に対抗してリトアニア内の反カジミエシ派がおしたてた大公候補に加担したサイド＝アフメドは、結局戦いに敗れ、さらにハジー＝ギレイによるクリミヤ汗国の建国によってクリミヤ半島をも失った。敗残の身となったサイド＝アフメドは

キエフで捕らえられ、その後も護送先で虜囚生活を続けたうえ1455年ころ生涯を終えたのである²¹⁾。

サイド=アフメドの死後ほどなくして、クチュク=ムハンマドも1459年に死亡した。同時代のライバルで強大な遊牧帝国を打ち立てて、四方に活発な軍事活動をくりひろげて中央アジアにまで勇名をとどろかせたアブル=ハイルや北方諸国の脅威となったサイド=アフメドと比べると、いささか地味な感があるのは否めないクチュク=ムハンマドであるが、将来に向けての国の基盤づくりは手堅く成し遂げた。クチュク=ムハンマドは、いまだ繁栄の盛りにはいたっていないものの十分に強固で、周辺の遊牧勢力と伍してかつてのキプチャク汗国領における首位の座を争うに足るような汗国を築き上げ、息子たちの手に残したのである²²⁾。

3 息子たち

クチュク=ムハンマドの死後には、3人の遺児が残された。長子のマフムード、その下の弟であったアフメト、末弟のマンガィシユラクである²³⁾。この息子たちは、どのようにして遊牧首長の跡継ぎとしての歩みを踏み出したのであろうか。

ポチェカエフによれば、父クチュク=ムハンマドが死亡した後、マフムードとアフメトの兄弟は、名目的には兄マフムードを長としつつ、支配領域を分けて大オルダの君主権を分有するようになった。それによれば、マフムードは、南ロシアの草原地帯、黒海北岸地帯を支配下にいれ、弟のアフメトはヴォルガ川の流域を中心に東方を自分の勢力圏にした²⁴⁾。

リトアニアの内訌への加担を契機とするサイド=アフメドの失墜は、黒海北岸の草原地帯に一時的な力の空白をもたらした。これによって生じた間隙を埋めるべく、マフムードが、西方に支配圏を拡大するのに成功すれば、クチュク=ムハンマドの一族は、大きく遊飛できたであろう。はたしてマフムードは1460年、タタール人の軍勢をひきいて遠征を敢行し、ロシア南方のリャザンを襲撃

している²⁵⁾。

クチュク＝ムハンマドは、在世中、ロシアに対してはおおむね平和的な関係を保ち、大きなトラブルを起こさなかった。その分、ロシア側の資料であまり多くを記されることがなかったクチュク＝ムハンマドとは異なり、彼の息子たちは、南方から襲い来る脅威としてロシア人の耳目を集める存在となった。大オルダは、ロシアに仇なす危険な遊牧集団という相貌をおびながらロシア人の前に姿をあらわすようになったのである。

父のクチュク＝ムハンマドから受け継いだ遊牧集団の支配者の地位をめぐっては長子のマフムードと弟のアフメトはライバル関係にあった。遊牧民の集団においてしばしば見られた兄弟間の権力争いである。

父の死後、とりあえず大オルダ全体の長となったのはマフムードであったが、彼の地位は盤石ではなかった。遊牧勢力の首長としての面目を逸するような失態を犯せば、部衆の支持が自分から離れて弟のアフメトの方にむかうということもありえたのである。はたして、ことは1465年に起こった。同年ロシアに遠征するべくドン川方面に向かっていた大オルダの部隊はクリミヤ汗国のハジー＝ギレイがひきいるタタール勢の急襲を受ける。大オルダ側は苦戦の末にクリミヤ・タタールをしりぞけたもののロシア遠征の中止をよぎなくされた。この不首尾によりマフムードの指導者としてのキャリアは終わりを告げ、代わってアフメトが部衆をひきいるようになる²⁶⁾。

アフメトのもとへ権力が移ってからほどなくして大オルダを取り巻く状況に大きな変化が訪れる。東方の雄であったアブル＝ハイルの死である。遊牧民のウズベクを束ねて強大な勢力をもっていたアブル＝ハイルは、クチュク＝ムハンマドの亡き後、その遺児たちを襲って暫時逼塞をよぎなくさせたことがあった²⁷⁾。これ以降、マフムード、アフメトの兄弟にとってはアブル＝ハイルの動静は、常に大きな気がかりとならざるをえなかった。

東方において絶大な権力をきざっていたアブル＝ハイルが1468年に死亡すると、それまで彼の支配下にあった地域では、爾後どのような勢力関係がうちた

てられるべきかをめぐる問題がもちあがった。その際、焦点となったのはアブル=ハイルの子孫たちもまたアブル=ハイルと同じような権力を享受するのを、関係する諸勢力が認めるかどうかである。

はたしてアブル=ハイルの息子シェイフ=ハイダルが汗位につくと、これに反発して西シベリアのチュメニの皇子で自身もまたシャイバンの血統者であったイバク（サイイド=イブラヒム）、マンギート族のベク（首長）であったアッバス、ムーサ、ヤムグルチなどが連合し、シェイフ=ハイダルとの闘争に突入した。アブル=ハイルの強力な支配の前に雌伏を強いられ、その境遇から抜け出す機会をうかがっていた地方勢力の首長たちが力を合わせてアブル=ハイル亡き後も彼の一門が権門でありつづけるのを阻止しようとしたのである。

この時、アフメトもまた軍勢をひきいて、シェイフ=ハイダルとその反対勢力との戦いの場となった東方にむかったが、そこで彼がいかなる役を演じたかについては、シェイフ=ハイダルの支援に出向いたという説と、その逆に反シェイフ=ハイダル連合の側についたという説がある²⁸⁾。前者であるならば、アブル=ハイルの息子はいずれ父と同じように強大な権力を手中にするであろうとよんで、これに助力して歓心を買わんとしたのでであろうし、後者であるならば、息子のシェイフ=ハイダルが父に比肩するような存在になる前に、その芽を摘み取ったのでであろう。また、アフメトは当初シェイフ=ハイダルを支援すべく東にむかったが、現地の状況を知るにおよんで反シェイフ=ハイダル側に転じた可能性も指摘されている²⁹⁾。シェイフ=ハイダルが父アブル=ハイルの再来となるのを防げそうと分かったうちは、そうするのにしくはないとなったという話であろう。

いずれにせよ、東方での争いは最終的にイバクがシェイフ=ハイダルを敗死させるというかたちで決着する。反シェイフ=ハイダル連合の勝利である。その後はアフメトも旗幟を鮮明にしてアブル=ハイルの一門に敵対する側につく姿勢を明らかにする。シベリアの諸勢力やマンギートと協力し、シェイフ=ハイダルの甥、すなわち、アブル=ハイルの孫であったムハンマド・シャイバー

ニーを追い詰めたのである。

さらにアフメトはマンギートの有力者であったムーサ、ヤムグルチの妹を妃とし³⁰⁾、彼らと盟約関係に入った。アブル＝ハイル亡き後の東方で、絶対的な権力者が不在で諸勢力が分立するようになった状況を是とし、そのなかの一つとの連携を図ったのである。

一方、西方においては大オルダの君主はいかなる立場をとろうとしたのであろうか。サイド＝アフメド没落後に彼にとってかわって黒海北岸の草原地帯の支配者になれたのであろうか。

ポーランド＝リトアニア、さらにモスクワ大公国などの北方の国々と戦って敗れたサイド＝アフメドは、このとき地盤の一つであったクリミア半島を失った。サイド＝アフメドからクリミヤを奪ったのは、ハジー＝ギレイなるタタール人の皇子であった。ハジー＝ギレイは、クリミヤで長らく支配の根を張って来た一族の一員であったが、サイド＝アフメドによってクリミヤから追われ亡命をよぎなくされた人物であった。ポーランド＝リトアニアの支援を得てクリミヤに凱旋したハジー＝ギレイは、1440年代末に汗位につき自分を始祖とするクリミヤ汗国を打ち立てた³¹⁾。このクリミヤ汗国が大オルダのあらたなライバルとして立ちあらわれたのである。

建国後しばらくは体制作りには余念がなかったハジー＝ギレイのクリミヤ汗国と大オルダのあいだには目立ったあつれきは生じなかった。両者のあいだに軍事的な衝突が起こったのは1465年である。ロシアへの遠征途上にあつた大オルダの軍を、ハジー＝ギレイがひきいるクリミヤ汗国勢が襲撃、遠征を頓挫させたのである。

これにより大オルダでは兄マフムードの権威低下とそれにとまなう弟アフメトの地位の上昇がおこったのは先に述べたとおりである。この点、アフメトにとってはクリミヤ・タタールによる襲撃は権力への扉を開く契機となつたのであるが、それと同時にアフメトもまたクリミヤが原因で兄と同じ轍を踏む可能性も十分にあつた。このためアフメトはクリミヤの動静に慎重に目配りするこ

とになる。うかつに手は出せないものの好機があれば、クリミヤ勢を、たとえその一部であっても、自分の陣営に引き込めればよい、と。

1466年にクリミヤ汗国の創始者であったハジー=ギレイが死亡すると、クリミヤでは内訌が生じた。後継の汗位をめぐる長子のヌル=デウレットと弟のメングリ=ギレイのあいだの争いである³²⁾。アフメトはこの機会を利用してクリミヤへの介入をはかる。

ハジー=ギレイのあと、まずヌル=デウレットが後を継いだ。バトゥ以来キプチャク汗国の都であったサライに座する君主であったという点で、地方勢力のクリミヤに対して形式的な上位者であったアフメトは、新汗のヌル=デウレットの求めに応じてクリミヤの汗位を認証するヤルルイクを発行した。しかしこれは、かえってクリミヤの人士の反発を買い、ヌル=デウレットは失脚、かわって弟のメングリ=ギレイが汗となった。

その後、1476年にクリミヤ汗国内の有力氏族のあいだで対立が生じると、アフメトはこれに乗じて自分の甥（一説には息子）のジャニベクを汗としてクリミヤへ送り込んだ。自分の身内を傀儡の汗にすえることによりクリミヤを意のままに牛耳ろうとしたのである。

これを機に、クリミヤでは短期間に終わったヌル=デウレットの汗への復帰などの幕間を含め、君主の地位をめぐる錯綜とした状況がつづいたが、最終的な勝利者となったのはメングリ=ギレイであった。1478年、メングリ=ギレイはオスマン朝の支援を受けてクリミヤの汗の座にもどり、それ以降、汗位を確保しつづけたのである。かくしてクリミヤの内訌を利用してこれを支配下に入れようとしてアフメトのもくろみはついでた³³⁾。

おわりに

ロシアの歴史上、大オルダなる言葉は、しばしばアフメト汗の名と対になって語られる。このアフメトがひきいた遊牧集団としての大オルダの歴史は、彼の父であったクチュク=ムハンマドの時代にさかのぼる。クチュク=ムハンマド

は、自分と縁が深かったマンギートの支援を受けてウルク＝ムハンマドとの戦いに勝ち抜き、ヴォルガ川下流のサライの支配者となった。こうしてキプチャク汗国の伝統的な中心部を手中にしたものの、新汗となったクチュク＝ムハンマドは、かつてのキプチャク汗のように東西に広がる草原地帯を睥睨するような存在ではなかった。

クチュク＝ムハンマドの時代には、東方にはアブル＝ハイル、西方にはサイド＝アフメドという二人の汗が強勢を誇っており、ヴォルガ流域のクチュク＝ムハンマドの勢威はそのあいだで埋没しがちであったのである。ロシアでは、大オルダをさして、時として「ヴォルガのオルダ」という呼び方がされたが³⁴⁾、これは、クチュク＝ムハンマド時代に大オルダが有していた支配領域の限定性、遊牧政権としての地方的な性格の故であろう。

大オルダはクチュク＝ムハンマドから息子たちへの代替わりのころから存在感を増しながら歴史の表舞台へと浮上してくる。その背景となったのは、四囲の状況の変化である。西方においては1440年代後半よりリトアニアの大公位をめぐる内訌に参画したサイド＝アフメドが北方諸国を相手にした戦いに敗れ没落する。一方、東方では1468年アブル＝ハイルの死後、アブル＝ハイルの強盛の前に逼塞を余儀なくされていた地方勢力が立ち上がり連合してアブル＝ハイルの息子のシェイフ＝ハイダルを倒した。

こうしたなか大オルダは、兄のマフムードから弟のアフメトへと指導者をかえながら勢力をのばしていった。クチュク＝ムハンマド、アブル＝ハイル、サイド＝アフメドの三者が競った時代が終わって、それぞれ息子たちの代になった際に首尾よく自身に有利な勢力バランスを打ち立てたのがクチュク＝ムハンマドの息子たち、とくにアフメトであった。

アフメトは、東方では、アブル＝ハイル一門の打倒に成功したマンギートなどとの同盟を図りつつ、西方では、サイド＝アフメドの息子たちを圧迫しながら勢力を拡充していった。クリミヤ半島こそハジー＝ギレイが建国したクリミヤ汗国に譲ったものの、かつてのサイド＝アフメドの支配領域を蚕食してヴォ

ルガ川から黒海北岸にかけての広大な草原地帯を支配するようになったのである。かくしてアフメトの大オルダは、ロシアにとって畏怖すべき遊牧勢力として立ち現われるにいたったのである。

注

- 1) モンゴルの支配＝「タタールのくびき」とそれがロシアの歴史におよぼした影響については、栗生沢猛夫『タタールのくびき ロシア史におけるモンゴル支配の研究』（東京大学出版会、2007年）および、Charles J. Halperin, *Russia and the Golden Horde: The Mongol impact on medieval Russian history*, Indiana University Press, 1985などを参照。
- 2) 「タタールのくびき」の終焉にかんしては、В. В. Каргалов. Конец ордынского ига. М., 2011 参照。
- 3) イヴァン3世とアフメトが対峙した「ウグラの対陣」については、Н. С. Борисов. Иван III. М., 2000. с. 430-45 参照。また、ロシア史における伝統的な評価に対し、この出来事の再評価を試みたものとして、Michael Khodarkovsky, *Russia's steppe frontier: the making of a colonial empire, 1500-1800*, Indiana University Press, 2002, pp. 77-82 参照。
- 4) В. Трепавлов. Большая Орда Тахт эли. Очерк истории. Тула, 2010. с. 5.
- 5) サイド＝アフメドについては、Р. Ю. Почекаев. Цари ордынские. Биографии ханов и правителей Золотой Орды. СПб., 2012. с. 244-52, В. Трепавлов. Большая Орда Тахт эли. с. 45-50 参照。
- 6) ウルク＝ムハンマドについては、Ю. Почекаев. Цари ордынские. с. 228-243 参照。
- 7) В. Трепавлов. Большая Орда Тахт эли. с. 58.
- 8) История татар с древнейших времен. Т. 3: Улус Джучи (Золотая Орда). XIII - середина XV вв. Казань,, 2009. с. 726.
- 9) マンギートと彼らを中心に形成されたノガイ・オルダについては、Б.-А. Б. Кочекаев. Ногайско-русские отношения в XV-XVIII вв. Алма-Ата, 1988, Трепавлов В. В. Орда самовольная: кочевая империя ногаев XV - XVII вв. М., 2014 参照。
- 10) Р. Ю. Почекаев. Цари ордынские. с. 230-31, В.Трепавлов. Большая Орда Тахт эли. с. 57.
- 11) В. Трепавлов. Большая Орда Тахт эли. с. 59.
- 12) Там же. с. 60.
- 13) ジョチの子孫たちが支配したジョチ＝ウルスについては、赤坂恒明『ジュチ裔諸政権史の研究』（風間書房、2005年）、川口琢司、長峰博之「ジョチ・ウルス史再考」『内陸アジア史研究』第28号、2013年参照。

- 14) キプチャク人はロシアではポロヴェツ人，西ヨーロッパではクマン人と呼ばれた。
- 15) ロシア西部のタタールスタン共和国の科学アカデミー発行の7巻本の浩瀚な通史『古代からのタタール史』の第3巻も『ジョチ＝ウルス（金帳汗国）13-15世紀中葉』История татар с древнейших времен. Т. 3: Улус Джучи (Золотая Орда). XIII – середина XV вв. と題されている。
- 16) トウカ・ティムルの血統者たちの系図については，Р. Ю. Почекаев. Цари ордынские. с. 404 参照。
- 17) シャイバンの血統者たちの系図については，Р. Ю. Почекаев. Цари ордынские. с. 403 参照。
- 18) История татар с древнейших времен. Т. 3: Улус Джучи (Золотая Орда). с. 724.
- 19) Там же. с. 726.
- 20) サイド＝アフメドは，リトアニアで育っただけでなく，そもそもリトアニアの生まれであったという可能性も指摘されている（В. Трепавлов. Большая Орда Тахт эли. с. 47）。
- 21) Р. Ю. Почекаев. Цари ордынские. с. 25. 一方，サイド＝アフメドの没落については，1456年のリトアニアへの遠征の際にキエフの公に敗れて捕らえられた（История татар с древнейших времен. Т. 3: Улус Джучи (Золотая Орда). с. 726-27）という説もある。
- 22) В. Трепавлов. Большая Орда Тахт эли. с. 61.
- 23) Там же. с. 62.
- 24) Р. Ю. Почекаев. Цари ордынские с. 240-41, 253-54.
- 25) В. Трепавлов. Большая Орда Тахт эли. с. 62.
- 26) Там же. с. 63. 一方，ポチェカエフは，マフムードは1465年の出来事でハジー＝ギレイに部衆の多くを奪われるなどして力を弱めたものの翌年のハジー＝ギレイの死などもあって勢力を盛り返したため，最終的にアフメドが権力をにぎるのはマフムードの死後になったとしている（Р. Ю. Почекаев. Цари ордынские. с. 254, 256）。ただし，その場合でも1465年に大オルダの部衆のあいだでマフムードの権威が大きく低下したのは確かであり，そのあと兄弟間の実質的な力関係が均衡ないし逆転していた可能性はあろう。
- 27) В. Трепавлов. Большая Орда Тахт эли. с. 62.
- 28) Там же. с. 65.
- 29) Там же. с. 66.
- 30) Р. Ю. Почекаев. Цари ордынские. с. 255.
- 31) クリミヤ汗国については，A. Fisher, *The Crimean Tatars*, Hoover Institution Press, 1978 参照。
- 32) スル＝デウレットとメングリ＝ギレイの兄弟については，拙稿「クリミヤ汗スル＝デウレツ

トとロシア」關西大学『文学論集』第68卷第2号，2018年参照。

- 33) クリミヤの内訌については，A. Fisher, *The Crimean Tatars*, pp. 8-11 参照。また，この内訌へのアフメトの介入については，В. Трепавлов. Большая Орда Тахт эли. с. 68-70 参照。
- 34) Н. С. Борисов. Иван III. с. 414.